

西鶴の隠れ里

描かれざる空白を読む

畑中 千晶

The mysterious and dangerous world of Saikaku's story:
Reading between the lines

Chiaki HATANAKA

One of the stories included in *Saikaku's Short Stories Gathered from Various Districts* (*Saikaku Shokoku Hanashi*), "A Pinwheel in Dreamland" ("Yumeji no Kazaguruma") is usually seen as a typical story of someone visiting a strange land, in the same way as is another story included in the same book, "A Treasure Ship in Future" ("Yukusue no Takarabune"). But when we try to adapt a typical template of stories about visiting strange lands to these two stories, the former deviates from the rules, as opposed to the latter, which adheres to the rules.

According to SAIJYOU Tsutomu (*Mythology of "Spirited Away"* (*Sen to Chihiro no Shinwagaku*), Tokyo: Shintensha, 2009, p. 24), we can recognize a typical template from many stories visiting strange lands. This template has four laws:

- I. When the protagonist visits the strange land, he goes there by chance.
- II. Every experience in the strange land is unusual.
- III. When the protagonist escapes from the strange land,

he carries it out through his own will.

IV. After leaving the strange land, the protagonist changes.

Adapting the template to the story “A Pinwheel in Dreamland,” we find that it lacks the fourth law. Saikaku seems to decide not to describe any changes of the protagonist.

This paper concludes that we can fill up the blank space concerning the protagonist’s changes with another story by Saikaku, which is included in *Vengeance stories of Samurai* (*Budo Denraiki*), “The Fatal Sea of Mermaid” (“Inochi Toraruru Ningyo no Umi”), which suggests that the protagonist, a brave soldier, will ruin himself without proving himself right.

1. はじめに

『西鶴諸国はなし』所収の「夢路の風車」という話は、同書に収められた「行末の宝舟」とともに、典型的な異郷訪問説話として読まれている。確かに「異郷を訪れて、また帰ってくる話」という点で、それは定型をふまえているように読める⁽¹⁾。だが、果たしてそれは本当に定型通りの異郷訪問説話と言えるのだろうか。定石をどこかで踏み違えているということはないか。

また、「夢路の風車」と「行末の宝舟」とを比べた場合、「前者は異郷でヒーローとなった奉行の凱旋を扱う輝かしいものだが、後者は竜宮に旅立った者たちが二度と戻ることはなかったという結末で、異郷訪問譚の内包する闇の部分を取っている」との見方もある⁽²⁾。これについてもまた、果たして「夢路の風車」は本当に「輝かしい」ストーリーと言えるのだろうかという疑問が浮かぶ。あるいは、誤解を恐れずに言えば、《闇》の深さは、実は「行末の宝舟」よりも格段に深いとさえ、言えるのではないか。というのは、結論を先取りして言えば、「行末の宝舟」は定石通りの異郷訪問説話だが、「夢路の風車」には、この定石を巧みに逸脱している部分が認められるからである。そして、この逸脱の中にこそ、描かれざる、また別の《闇》が広がっていると見る。

本稿が考察対象とする「夢路の風車」は、西鶴研究会編『西鶴が語る江戸のミステリー』の巻頭話に据えられているものである。この教科書は、「ミステリー」をキーワードとして、西鶴作品が含みもつ多様な謎、解明し尽くせない闇の探究を試みたものである。筆者も分担執筆に加わった縁で、その後も折に触れて、本書を教材として大学の講義で用いてきた。毎回の講義で、学生らと共に西鶴が仕掛けた謎の解明に（あるいはその謎をますます深く濃くすることに）挑むのは、心躍る時間でもある。そうした実践の中で、本話は当初想定していた以上に、実は相当に「怖い」話なのではないかと考えるに至った。

本稿では、異郷訪問説話の型とその逸脱という点から見えてくる、描かれざる空白——辺境警備の奉行の行く末が暗示する、思いのほか陰惨な結末——について、西鶴の他作品をも参照しつつ、その意外な怖さに迫ってみることにしたい。

2. 異郷訪問説話の型とその逸脱

西條勉による『千と千尋の神話学』は、神話学の立場から異郷訪問説話の話型分析を実践し、スタジオジブリ映画『千と千尋の神隠し』がなぜ面白いのかを読み解いた興味深い書である。西條（2009）によれば、文字に記された世界最古の物語『ギルガメシュ叙事詩』にもある異郷訪問型の話とは、世界最古の話型であり、それゆえにダイヤモンドのように完成度の高い形式をもつという（同書13-18ページ）。つまり、作者の個性さえも超越するほどに非常に硬度が高く、壊れにくい話型として存在しているということである。また、その異郷訪問説話には、大きく分けて次の四つの法則が存在するとされる。

第Ⅰ法則 異郷に入るときは、偶然に行く。

第Ⅱ法則 異郷での体験は、異常体験である。

第Ⅲ法則 異郷から出るときは、自分の意志で出る。

第Ⅳ法則 異郷から出た後、主人公は変化する（同書24ページ）。

試しに、この法則を『伽婢子』「隠里」に当てはめて見てみよう^③。

まず、「第Ⅰ法則 異郷に入るときは、偶然に行く」についてはどうだろうか。立身を願う武士が、京都在住の知人を頼って播州印南（現在の兵庫県加古郡稲美町印南）から上京する。だが、この知人はすでに亡くなっており、落胆して別の知人を頼ろうと宇治に向かう道中で、日が暮れて道に迷い、来栖野の古い堂で夜を明かすこととなる。深夜、異形の者ら（猿の顔をし、武士の装束に身を包んだ者ども）がこの堂に現われる。化け物だと察知した武士は、天井に隠れ、大将らしき者の肘を矢で射る。不意を突かれ、恐怖におののいた異形の者らが退散した翌朝、点々と血がこぼれているのを頼りに「行すゑを見とゞけばや」と跡を追う。西鶴の「夢路の風車」に登場する中心人物も武士であり、その剛胆さを強調する形で人物造型がなされている。この『伽婢子』の中心人物も「弓馬の道に稽古の功をかさねた強者^{つわもの}として造型されている。剛胆さをもつゆえに、異界との接点も開けていくという特徴が、両話の共通項として指摘できる。やがて血の跡は、大きな穴の淵に行き着く。ここで、武士はいよいよ妖しいとは思いながら、穴の淵で思案するうち、偶然にも雨で濡れた土がすべり、踏み外して穴の中へと落ちていく。よって、「異郷に入るときは、偶然に行く」という第Ⅰ法則は、極めて忠実に守られていることが確認されるだろう。

では、第Ⅱ法則はどうであろうか。洞穴の奥に宮殿があり、猿の顔をした異形の者どもが門番をしていることも異常であるが、武士が、偽りをもって異形の者を退治するという冒険もまた、伝奇的な奇異な魅力をもたらす。この武士は、自らを医者^{くすし}と偽ったうえ、獣を仕留めるため鏃^{やじり}に塗る大毒を「不老不死」の薬と偽って猿どもに飲ませ、一網打尽にするのである。また、猿にかどわかされた二人の美女と出会うことも異常なことのひとつであろう。「異郷での体験は、異常体験である」という第Ⅱ法則もまた、十分に守られていると言える。

では、「異郷から出るときは、自分の意志で出る」という第Ⅲ法則はどうであろうか。この武士は、猿の門番に向い、「都に帰るべき道をしめし給へ」と述べていることから、速やかに帰ろうとの意志を固めているよう

に思われる（あるいは、これは、医者らしく装って門番を欺かんがための言辞か）。また、猿の退治を終え、二人の美女から都に連れ帰って欲しいとの懇願を受けた際、人間界に立ち返る道がわからず、「いかゞすべきと案じわづらふ」さまが描かれる。ここにも、異郷を出ようとする意志が確認される。意志はあるが、方法がわからないというところで、新たな異形の者が出現する。大黒天神の使者、五百歳の^{よわい}齢を保つ白鼠がその正体である。八百歳の齢を保つ猿どもに住み処を奪われていたが、天道が武士の手を借りて、猿を滅ぼしたのだと説く。この白鼠（豚の大きさという）が武士らを人間界に送り返してくれるのである。挿絵には、武士、二人の美女のそれぞれを背に乗せて走る鼠と、財宝を口にくわえて共に走る鼠が描かれている。よって、第Ⅲ法則もまた、守られていると言えるだろう。

第Ⅳ法則はどうであろうか。「異郷から出た後、主人公は変化する」という法則は、多くの場合、「主人公は成長する」ということになるだろう。この武士の場合、美女の親それぞれに請われて、二人とも妻に娶り、「それより武門の望をはなれ、富裕安穩の身となりぬ」という変化を遂げる。武士としての立身出世を望んでいた者が、異郷体験を機に武士であることを放棄するのは、「成長」とは言えないだろうが、少なくとも「変化」したには違いない⁽⁴⁾。以上の検討から、『伽婢子』『隠里』は、異郷訪問説話の法則に完全に当てはまっているということが言えるだろう。

それでは、西鶴の「夢路の風車」の場合はどうであろうか。第Ⅰ法則に関しては、「有時山人の道もなき草木をわけ入を、奉行見付て跡をしたひ行に」とあり、偶然に見かけた「山人」が道もないような草木の間を分けて進んでいく姿に興味を感じ、その跡を付けていくのであるから、この時点では、法則に従っていると言える。また、峰を越え、谷間を越えて追跡した先に「おそろしき岩穴」があり、例の「山人」がここに入ったのを見届けた時、「我是迄来て、此中見届ずにかへるも、侍の道にはあらず」と思い定めてその中に入る点に関しても、これは、領内の諸事情を隈なく把握しておくべき立場にある奉行としての使命感と、未知への恐怖をも克服すべきと思う、侍ゆえの克己心と思われる。つまり、奉行は私利私欲に突

き動かされて異郷に入ったのではない（自分で望んで行ったのではない）という点で、第Ⅰ法則にほぼ当てはまると考えて良いだろう。異郷には「望んで行くと帰れない」という裏の法則があるという（西條、2009、64-66ページ）。たとえば、『千と千尋の神隠し』において、千尋の両親は、廃墟となったテーマパークを見て、「おもしろそうだから行ってみましょうよ」と自らの意志で近づき、無人屋台の料理を無断で大量に食し、結果として、千尋の助けなくしては帰れない豚の姿へと変わる。これに比べると、「夢路の風車」の奉行の場合、個人的な利益や興味のために自ら進んで異郷に足を踏み入れたのではないという点で、やはり「偶然に行く」部類に入れて良いと判断される。

第Ⅱ法則については、これは、山中の岩穴の奥で金魚が泳いでいる点から始まり、豪華な宮殿のたたずまい、冬山に春の景色が出現する不思議、女房を二人娶る婚姻制度など、すべてが異常であって、完全に当てはまる。

では、第Ⅲ法則はどうであろうか。異郷の国王に「汝此国にては命みぢかし。いそひで古里にかへれ」と言われれば、誰しも一刻も早く帰りたいという心境になることであろう。この点は、明示的ではないものの、ほぼ法則に合致していると考えられる。

問題は第Ⅳ法則である。主人公は果たして変化していると言えるのだろうか。多くの異郷訪問説話において、主人公は異郷を脱出した後で人間的な成長を遂げる。これは、特に童話などに顕著な展開であろう。先に検討した『伽婢子』においては、武士であった主人公が、異郷から持ち帰った財宝を元手にして暮らすことを思いつき、武士であることを捨てるという展開を遂げる。成長とは言えないものの、確実に変化していると言える。ところが、「夢路の風車」においては、何の変化も描かれていないのである。異郷脱出後の出来事は、板本においてわずか二行あまりほど、次のように記されている。

すみなれし国にかへり、ありのままに申せば、其所をさがし出せと、
数百人山入して、谷峰たつね見れども、今にしれがたし

もとの国に帰り次第、国主にすべてを報告した。その結果として数百人

が手分けして山の中をあちらこちらと探したが、今に至るまでその岩穴は見つからない。これは、「隠れ里」伝説としては当然の帰結であって、それ自体に不思議はない。二度とその場所に帰れないからこそ、「隠れ里」なのである。だがこの一節は、異郷訪問説話の法則に照らした場合、「主人公の変化」という局面が明らかに削ぎ落とされている結末ということになりはしまいか。『伽婢子』の主人公は、異郷から財宝を持ち帰っているが、本話の主人公は、豪華な反物「から織の嶋きぬ」を褒美として異郷で受け取るところまでは記されているが、それを確かに持ち帰ったという記述はどこにも見当たらない。たとえば、宮沢賢治の「どんぐりと山猫」では、一郎が家に帰った時、黄金のどんぐりは、「あたりまえの茶いろのどんぐり」に戻っていたという。本話では、そうした品物の劣化（あるいは通常化）さえも、描き込まれていないのである。奉行が体験した異郷を証明できるものは、何一つないということである。そして、異郷訪問説話の法則に照らした場合に見えてくるのは、文面においては少なくとも主人公の変化は何一つ描かれず、その後の情報が欠けているということである。これは、何を意味しているのであろうか。西鶴は意図的に情報の欠落を用意したのであろうか。

それについての検討は、今しばらく保留にし、ここでもう一つ、『西鶴諸国はなし』において、本話と共に論じられることの多い「行末の宝舟」についても、法則との照応関係を確認しておきたい。最初に異郷の訪問者となる「根引の勘内」という暴れ者は、諏訪湖の氷が溶ける季節に、危険だと止められたにもかかわらず、回り道を厭い、自分の意志で湖の上を渡った挙げ句、浪の下に沈むこととなった。「望んで行くと戻れない」という法則通り、勘内は異郷にとどまる存在となる。また、勘内の語る異郷の魅力（とりわけ異郷の女たちの好色ぶり）に心惑わされた男たちもまた、望んで行った以上、決して戻れないこととなる。他方で、「命に替る程の用あり」との口実を設けて一人乗船を取りやめた男が、その後長寿を保ったという事実も、この法則を側面から補強するものとなるだろう。このように「行末の宝舟」は、見事なまでに異郷訪問説話の定石に完全に当てはまる

ものとなっているのである。

3. 「辺境警備の奉行」という人物設定

「夢路の風車」の主人公には、どのような人物造型がなされているだろうか。

まず、飛驒という山深い土地で辺境警備に当たる奉行としての設定が、第一に挙げられる。この「辺境警備の奉行」という位置づけは、西鶴の描いた他の話と本話とを対比させるうえで、鍵になるポイントである。これについては、後に再度触れることにしたい。

第二に、異郷への入り口となる岩穴を前にして、たじろがずにその中に入っていく勇気ある武士の姿も記憶されるべきである。先に検討したように、ここには、領内の諸事情を隈なく把握しておくべき立場にある奉行としての使命感と、未知への恐怖も克服すべきと考える、侍ゆえの克己心が読み取れる。

第三に、異郷で夢枕に立った、「首」だけで胴体のない女商人二人の訴えを聞き入れ、その証拠（二またの玉柳）を問い質したうえで、実際に女性たちの遺体を発見し、谷鉄という男の不正について「国王」に報告して、無事に殺人事件を解決するという点に、武士としての剛胆さ、冷静沈着な判断力を見て取ることができる。

これらを総合してみるなら、この奉行は、武士としての行動力、判断力、誠実さなどの点で、非常に好意的に造型されていると言って良いだろう。

だが、ここでさらに踏み込んで考えてみるべきことは、異郷が人間の深層心理の投影ともなっているということである。自らの剛胆さに自信をもつ武士は、異郷において、不正を暴き、手柄を立てる。これは、見方を変えるなら、理想的な武士像を自らにおいて体現したいという深層心理の表われと言えるのではないだろうか。そして、異郷での成功体験が、その後の武士の判断や行動をも狂わせていくことになる。

異郷においては、夢枕に立った女性二人の言葉が、夢から覚めたのちも、

ことごとく「現実」（あくまでも異郷内体験としての現実）において裏付けられてゆき、結果として、異郷に正義をもたらす特異な存在感を発揮する（あたかも、町人だけが存在していた世界に、武士が異人として混入し、事件を解決したかのごとくである）。人の命を奪ってでも、美しい絹織物を手に入れようとする、物欲に支配された暴力的な世界において、武士としての知力、胆力が最大限に発揮されるのである⁽⁵⁾。

やがて、異郷から送り帰されたこの男は、現実世界において、異郷での体験を再現しようとするかのように、国の守に「ありのままに申」し上げるといふ愚行に出る。思慮深いはずのこの奉行にしては、これは、いささか短慮にすぎた行動とは言えまいか。「数百人山入して、谷峰たつね見れども、今にしれがたし」との一文に、人海戦術で是が非でも隠れ里を探し出そうとする国の守の欲望が見え隠れしている。その動機は、単なる異郷への憧れなどではなく、世にも珍しい絹織物を初めとする財宝を入手することにあるだろう。だが、隠れ里の本来の性質からして、二度とその場所を見出すことはできない。奉行の言葉に「信」を置き、あまたの武士を動員したものの、その言葉を裏付けるものは何一つ見出すことはできなかったのである。奉行の立場はその後一体どうなるであろうか。

ここで再び、「辺境警備の奉行」という設定について考えてみたい。この奉行は郡奉行こほりと呼ばれる存在であろう⁽⁶⁾。この話の舞台は、鉾山と山林という天然資源に恵まれた飛騨の地である。飛騨は、慶長5年（1600）から元禄5年（1692）までの93年間にわたり、三万八千石の高山藩、金森氏六代が治めていた土地である（『岐阜県史』通史編近世上、533ページ）。『西鶴諸国はなし』が出版されたのは貞享2年（1685）、その7年後に飛騨は幕府の直轄地となる。幕府はなぜ飛騨の土地を欲したのだろうか。表面的な理由はどうあれ、鉾山と山林という天然資源がその根底にあったことは否定できないのではないか。つまり、西鶴当時、飛騨という土地は、山深く人影もまばらで、しかも、豊かな資源（金銀財宝のもと）が眠る、まさしく「隠れ里」にふさわしいイメージを宿した土地と言って良いだろう⁽⁷⁾。

ところで、「辺境警備の郡奉行」が中心人物となり、異形の者に遭遇す

る話は、他の西鶴作品にも見出されるものである。『武道伝来記』所収の「命とらるる人魚の海」を次に参照してみる。

松前藩の海浜警備の奉行役人・中堂金内^{きんない}が、ある時、「鮭川」と呼ばれている入り江を小舟で横切ろうとしたところ、人魚に遭遇する。船頭や他の人々は恐怖のあまり気絶するが、ただ一人金内のみ、小型の弓を射かけ、命中した人魚は波に沈んで一件落着した。その後、城下に戻り、業務報告を行ったついでに、旅物語の一つとしてこの一件を語ったところ、皆がそれは手柄だと褒めそやし、ぜひ、大名に報告しようと騒ぐ。ところが、それを快く思わない青崎百右衛門という武士が、この人魚退治を偽りであるかのように申しなし、確かでないことは御前の耳には入れない方が良いと述べる。金内の肩をもつ武士が、歴史上の怪事件を多数紹介しながら、このたびの大魚も十分にあり得ることだと説得を試みるも、なお、百右衛門は嘲弄し続ける。これを聞き伝えた他の人々には、金内の言を胡乱^{うろん}に思う者もいて、金内は腹に据えかね、百右衛門を討ち果たそうかと思う。だが、それではさらに自分が疑われるだろうと考え、その人魚を探し出し、動かぬ証拠を示したうえで百右衛門を討ち果たそうと覚悟を決め、「鮭川」のほとりで人魚搜索に専念する（漁師を雇い、大網を引かせたほか、自身も血眼になって探し続ける）。だが、心労がたたったのか金内はその地で絶命。金内の妻もすでに死んでいたため、あとには娘一人が残される。娘は父の後を追って死のうと駆けつけるが、誰一人それに続く使用人もなく、娘の孤独な境涯が強調される。唯一、娘の後を追って駆けつけたのは、金内の側女である鞠という女性のみであった。この二人が金内の遺骸を抱いて海に飛び込もうとしたその瞬間、殿の命によって駆けつけた武士が二人を引きとどめ、百右衛門という敵を討つようにと諭す。助太刀役の武士も付き、二人の女性が見事百右衛門を討ち果たし、百右衛門の一族は滅亡、二人の女性はそれぞれに嫁ぎ先を得るという目出度い結末が用意されている。さらに、それから五十日を経て、金内の矢が刺さった人魚が発見されたと殿の御前に差し出され、金内は死後に侍の名をあげることになる。

本話は、諸国の敵討ちを取り集めた『武道伝来記』に収められており、

伝奇的興味を契機として話を展開させているものの、眼目は武士の名誉の失墜と回復とにある。その点で、諸国の綺談を取り集めた『西鶴諸国はなし』とは、趣向の違いはあろう。だが、主要人物の設定という点に限るなら、「夢路の風車」は飛驒という辺境を警備する「奉行」であり、「命とらるる人魚の海」は、これもまた松前の海浜という辺境の地を警備する「奉行」という設定で、両話は共通しているということになる。しかも、「命とらるる人魚の海」では、歴史上、話題となった怪事件の第一の例として、「古代にも、人王十七代仁徳天皇の御時、飛驒に一身両面の人出る」（傍点筆者）との話題が語られている。これは、松前での綺談を語る西鶴が、飛驒の地における綺談を、同時に想起していたことを示すものとなるだろう。

松前という土地についても、『松前町史』を参照しつつ、さらに考察を進めてみよう。この松前藩は、安政元年まで近世唯一の無高の藩であるという。将軍からの知行は、主にアイヌ交易独占権の形を取り、上級家臣に対する知行もその独占権の分与（^{あきないば}商場知行）となる。このほか和人地内の一定の村を支配する権利や、和人地内で鮭漁をする権利、松前・蝦夷地の一定地域で鷹を獲る権利などが、上級家臣に対する知行となっていた（『松前町史』通説編第1巻上、407-409ページ参照）。ここで、西鶴の話に登場する地名が「鮭川」であることを想起したい。諸注釈を見ても、「鮭川」は未詳とあるばかりだが、あるいは、特定の地名である必要はないのではないか。松前の地において鮭の捕れる川とは、そのまま知行としての役割を果たすものである。しかも、藩主一族や家老職などの最上級家臣にのみ許された知行である。「鮭川」という名は、そのまま「富の流れる川」の謂いとなるのではないだろうか。つまり、人魚という異形の存在に遭遇した場所とは、富の眠る場所でもあったということである。

このように考えた場合、「夢路の風車」との近似性がさらに高まるように思われる。すなわち、富の眠る飛驒の奥山（「隠れ里」）と、富の眠る「鮭川」（松前の「隠れ里」）という対応が見出されるからである。しかも、その「隠れ里」において、異形の者を相手にしてもひるまず、剛胆さを見せることのできた者だけが、奇異な体験をするのである。

その一方で、「命とらるる人魚の海」の展開は、「夢路の風車」における情報の欠落を補うものとしても機能していくように思われる。情報の欠落とは、異郷訪問説話の第Ⅳ法則「異郷から出た後、主人公は変化する」という展開が、「夢路の風車」には描かれていないという、先に検討した問題のことである。

「命とらるる人魚の海」の金内は、異形の者に遭遇しても慌てず、心静かに弓で仕留める。また、その一件を声高に自慢するでもなく、旅の四方山話の一つとして淡々と仲間に披露する、節度ある振る舞いを見せる。そうではあるけれども（あるいは、金内が淡々と披露したからこそ）、話題の珍奇さがかえって人々を強く刺激し、結果として、金内の発言の信憑性までが疑われ、噂に上ることとなった。これは、「武士の一分」に関わる事態である。武士がひとたび口にした言葉は、時として命に代わるほどに重い。

そうした武士の姿をのちに描くことになる西鶴が、他方で、『西鶴諸国はなし』において、珍奇な出来事の体験者に、あえて武士を置いているのである（もっとも、辺境すなわち異郷との境界領域を警備している以上、珍奇な出来事に遭遇するのもしやむを得まいという見方も、他方で十分成り立つだろう）。しかも、その武士は、怪事件を体験した後、包み隠さず大名にその内容を報告している。だが、その後に武士の言葉を裏付けるものは何一つ確認されることはなく、多勢がむなしく山野を搜索したにすぎないとなれば、この奉行に対する評価は一体どうなるであろうか。「夢路の風車」は、それについて一切触れることなく、語り終えている。だが、「命とらるる人魚の海」を補助線に用いるなら、奉行の行く末は、「命とらるる飛驒の奥山」とでも言い換えられるものなのではないだろうか。

4. おわりに

以上のような検討を経たうえで、「夢路の風車」と「行末の宝舟」とを再び比べてみるなら、「前者は異郷でヒーローとなった奉行の凱旋を扱う輝かしいもの」との見方は当てはまらないものとなってくるだろう。むしろ

ろ、異郷での成功体験によって、判断に狂いの生じた男が、現実世界においてやがて危機に瀕していくであろうことを予感させる、スリリングな話ということになる。「行末の宝舟」の抱える闇とはまた質の異なる、いっそう深く濃い《闇》を抱えた人間ドラマを透かし見せてくれる話となっているのである。西鶴が語る「ミステリー」の怖さとは、かくも多面的である⁽⁸⁾。

(注)

- (1) 西條勉は、異郷訪問説話のことを「一言でいえば、ある人物が別世界に迷いこんで脱出する話」と要約している（西條、2009、12ページ）。
- (2) 西鶴研究会編『西鶴諸国はなし』所収の藤川雅恵「異郷訪問譚のダークサイド」（「行末の宝舟」鑑賞の手引き）113ページ参照。
- (3) 従前の研究において『伽婢子』所収の「隠里」は、「夢路の風車」の直接の典拠とはされていない。本稿では、影響関係の有無については問わず、異郷訪問説話の型を確認する目的で、主要人物の属性（剛胆な武士）などの点で共通項を有する『伽婢子』「隠里」を、対比参照の材料として用いることにする。
- (4) 『伽婢子』「隠里」の解説によると、末尾の「又五郎は後つゐに子もなく、その行がたをしらず」との一文が、原話『剪燈新話』卷三「申陽洞記」にはないものであり、浅井了意が付け加えた小さな改変であるという。異郷体験がその後の人生に陰を落とすという、ある種の不吉さを浅井了意は感じ取り、こうした改変を加えたものか。
- (5) この暴力的な世界について森耕一は、「こちら側の世界の本質をさらにハードに凝縮して鏡に映し出したような、欲望全開の逆ユートピア（『西鶴が語る江戸のミステリー』、18ページ）」と評している。
- (6) 『山川日本史小辞典』の「郡奉行」の項には、「江戸時代、諸藩の農政・行政を統轄した役職。家老や勘定奉行の下にいて、宗門改・訴訟・警察・年貢徴収などの仕事を城下にある郡役所で執務する一方、郡内の巡見・巡察などを行った（以下略）」とある。
- (7) 飛騨幕領化については、幕府が金森氏の「莫大な鉱山と山林の二資源に着目し」たとする立場がある一方（『岐阜県史』通史編近世上、18ページ）、「明暦の江戸大火などを経験した幕府が、飛騨の山林資源に着目したことは一応うなずける。しかしその鉱山資源についての幕府の意図をあまり過大評価してはなるまい（中略）金森氏転封の元禄五年（一六九二）の飛騨の金銀山は全く衰微していたからである（『岐阜県史』通史編近世下、263ページ）」とする見解もある。飛騨の鉱山は、「資力がきわめて貧弱な小規模の分散的経営であって、少しでも生産条件が悪くなればすぐ休止するが、また生活の糧^{かて}をうるために繰り返して開発が試みられている。いわば「幻」を追っての断続的な生産活動」であったという（『岐阜県史』通史編近世下、261-262ページ、下線引用者）。この解説は実に示唆的である。鉱山とは元来が「山師」「山が当たる」と言うごとく投機的なものである。人間の欲が結晶した「隠れ里」に、実に似つかわしいと言えるのではないだろうか。なお、西鶴研究会編『西鶴諸国はなし』所収の宮本祐規子「異世界の記号」（「夢路の風車」鑑賞の手引き）においても、やはり飛騨の森林と鉱山が「宝の山」として指摘されている。
- (8) 講義においては、この話の怖さを分析せよとの課題を出した。すると、ある学生（中国からの留学生）が、荘子の胡蝶の夢のごとく、現実と夢との区別が曖昧となること、つまり人間存在の根源的な怖さに繋がる面があるという趣旨の分析を行った。非常に鋭い指摘である。そして本稿は、その曖昧さが人間の命を奪う結果に結びつくところに、怖さを見出そう

としたものである。

(参考文献)

I 本文・注釈

『新編西鶴全集』 第2巻・本文篇、勉誠出版、2002年

『西鶴諸国はなし』 西鶴研究会編、三弥井書店、2009年

『西鶴が語る江戸のミステリー』 西鶴研究会編、ペリかん社、2006年

『伽婢子』 江本裕校訂、東洋文庫、平凡社、1988年

『注文の多い料理店』 宮沢賢治、新潮文庫、2010年

II 辞典・県史等

『山川日本史小辞典』 新版、山川出版社、2005年

『岐阜県史』 通史編近世上、岐阜県、1968年

『松前町史』 通説編第1巻上、松前町、1984年

III 研究書

西條勉 2009 『千と千尋の神話学』、新典社新書

[付記]

西鶴本文の引用は、『新編西鶴全集』を使用し、漢字を適宜改めた。